

## 10月例会報告

【日時・会場】2001年10月26日(金)19:00～筑波大学附属高校会議室→～2:00 カリンカ

【参加者(会員)】荒井義行(毎日新聞運動部) 小金丸浩志(京華高校)☆★ 内藤隆(横河FC事務局) 多田寛((株)日本テレビフットボールクラブ) 中塚義実(筑波大学附属高校)☆★ 浜村真也 三堀潔貴(都立北野高校サッカー部顧問)☆★ 宮崎雄司((有)オフィスアステカ代表/サッカーマニア編集長)

【参加者(未会員)】麻生征宏(筑波大学附属高校非常勤講師) 阿部幹雄(ジョカトーレFC) 石村俊浩(東京都クラブユース連盟/横河FC) 伊藤浩之(フォルテSC事務局長) 江添誠(京華高校サッカー部コーチ)★ 遠藤宏一(足立学園)★ 岡野玄(毎日コムネット) 角本芳樹(都立松が谷高校)☆★ 加藤善之(東京都クラブユース連盟/ヴェルディ) 亀田耕司(成蹊学園)☆★ 岸本譲二(毎日コムネット) 蔵森紀昭(成城学園)☆★ 酒井美央(ジョイ(株)) 半澤隆憲(私立海城高校サッカー部顧問)★ 馬橋孝悦(ジョカトーレFC) 本宿博史(三宅高校)☆★ 吉田健太(ジョイ(株))

注1) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

注2) 今回は、「東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)」と「東京都高体連サッカー科学研究会」を兼ねて開催しました。名前の右肩の「☆」は準備委員を、「★」は高体連サッカー科学研究会員であることを示します。

東京都ユースリーグ創設へ向けての動きを追う  
ープレリーグから何が見えるかー  
東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)

<目次>

1. DUOリーグ発足の経緯と今日までの歩み
2. 「東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)」発足の経緯と議論の経過
3. 各地区「プレリーグ」の現状と課題
4. 2010年のサッカー環境ーユース年代を中心に

<ディスカッション>

<感想・意見(中塚義実)>

1. DUOリーグ発足の経緯と今日までの歩み

ユース年代のサッカーの構造改革を目指して、東京都文京区・豊島区の高校サッカー部とクラブユースによってDUOリーグが発足したのは1996年度。以後、「理念」に賛同する仲間はどんどん増え、組織としても整備されてきた。そして、この動きを東京都全域に、さらには全国へと展開すべく、底辺から働きかけている(これらについてはすでに発表・報告済みなので省略)。

## 2. 「東京都ユースリーグ準備委員会(仮称)」発足の経緯と議論の経過

### (1) 準備委員会(仮称)の位置づけ(含都高体連科研との関係)

2000年6月の東京都サッカー協会理事会にて、「東京都ユースリーグ創設」の方向性が承認され、東京都協会第2種委員会で準備を進めることとなった。しかし、その後準備は進展せぬまま2000年度を終えようとしていた。

方、高体連の有志で組織されている「東京都高体連サッカー科学研究会」(代表者・中塚)では、2000年度の活動方針として「ユースリーグ発足へ向けての調査・研究活動」を掲げていた。また「DUOリーグ」においても、「2001年度に東京都ユースリーグを発足すべく行動を開始する」を2000年度の活動方針として、様々な活動に取り組んでいた。

そこでこの両団体が提案母体となり、高体連サイドでユースリーグ発足へ向けて動き出すことを、2000年度末の東京都高体連委員総会で提案し、2001年4月の総会の場で「各地区より準備委員1名を選出する」ことを依頼した。こうして各地区より選出されたのが8名の準備委員であり、取りまとめ役の中塚と共に、高体連サイドとしての準備を進めることとなった。

こうした経緯から、本準備委員会は、高体連サッカー科学研究会とも密接な関係を保ちながら、今後はクラブユース連盟へも声をかけて、「ユース年代のリーグ戦」を目指して準備を進めていきたい。リーグが一つのシステムとして機能していくためには、指導者の観点だけでなく、経営的な観点も不可欠である。外部の様々な意見が取り入れられる"開かれた委員会"として、ネットワークを広げながら進めていきたいと考える。

なお、準備委員会は意思決定機関ではない。あくまでも第2種委員会への諮問機関である。21世紀のユースサッカー環境のモデル的事例となるよう、検討を進めていきたい。

(都ユースリーグ準備委員会第1回会合報告(2001.6.12.)をもとに構成)

### (2) 準備委員会(仮称)における議論の経過

8つの地区から選出された委員と代表者・中塚で「準備委員会(仮称)」が5月に組織され、「東京都高体連サッカー科学研究会」の月例会を兼ねて議論が進められた。「準備委員会(仮称)」としているのは、本来「ユースリーグ」の準備委員会は、高体連だけでなく、クラブユース連盟も含めて組織されるべきところを、高体連だけで「仮に」スタートさせているという意味である。

#### 第1回会合(05.25.於海城高校) 兼都高体連サッカー科学研究会

各地区の現状(施設、指導者、既存の大会など)について各委員が報告、現状を把握した。また、DUO

リーグをモデルとするユースリーグの可能性について意見交換した。

第2回会合(06.22.於海城高校)兼都高体連サッカー科学研究会

リーグシステム導入に伴う諸問題について議論し、「プレリーグ」を試験的にやってみる方向で意見が一致した。

第3回会合(07.06.於海城高校)

「プレリーグ」準備の手順について、DUOリーグのノウハウが紹介され、可能性を検討した。

第4回会合(09.21.於海城高校)兼都高体連サッカー科学研究会

各地区「プレリーグ」の現状と進行状況の報告をし、可能性と今後の課題を出し合った。

第5回会合(10.26.於筑波大附高)兼都高体連サッカー科学研究会／サロン 2002 月例会

→本日

(3) リーグシステム導入に伴う諸問題(第2回会合にて議論)

リーグシステム導入に伴う問題点として以下について議論し、大まかな方向性を確認した。しかし、「はじめてみないとわからない」ところもあるので、「プレリーグをやってみよう」ということになった。

- 1) "リーグの位置づけ"について—既存の大会とリンクさせるのか  
高体連やJCYの既存の大会とはリンクさせない
- 2) "地域"について—「どこで」「どのような地区割りで」行うか  
底辺は狭いエリアで。上へいくに連れて広がっていく衛星型サッカー環境
- 3) "時期・期間"について—「いつ」行うか  
2シーズン制(4～7月と9～12月)
- 4) "メンバーシップとエントリー"について—「誰が」参加するのか  
加盟はクラブ単位、参加はチーム単位で
- 5) "運営"について—「誰が」「どのように」運営するのか  
参加者の高い当事者意識が前提

(4) 「プレリーグ」の準備(第3回会合にて議論)

検討材料を得るために、試験的に「プレリーグ」をはじめることとなった。期間は2001年9～12月。

都内の8つの地区ごとに、できる範囲ではじめている。準備の手順は以下のとおりである。

1) "理念"を伝える

「申し込めばゲームができる」感覚でなく、理念に賛同し、実現へ向けて努力するかどうか重要

2) 参加希望クラブに各種調査を行う

a. 基礎調査

"クラブ"の責任者と連絡先を特定。各クラブから何チーム参加希望かを確認

b. グラウンド日程調査

学校のグラウンドを含め、いつ、どの時間帯に使用できるのかを"クラブ"ごとに提出

c. 参加チーム日程調査

期間内のスケジュール、すなわち試合実施の可否を"チーム"ごとに提出

3) 最大8チームになるようブロック割り

8チーム=1節4試合、7週間のリーグなら4ヶ月で実施可能

4) 試合の組み合わせ作成 機械的に導かれる

5) リーグ戦開催日を決定

各チーム、グラウンドの日程をみてスケジュール確定 組み込めないゲームは、各チーム同士で連絡を取り合って消化してもらう。

3. 各地区「プレリーグ」の現状と課題

各地区のプレリーグの状況は以下の通り。ここでは各準備委員からの報告を、9月の準備委員会報告を含めて構成した。

<第1地区> (江戸川・江東・葛飾・墨田・荒川)

葛西工、小岩、農産、南葛飾と修徳A、Bの計6チームで組織され、9月16日から始まった。人数の少ないチームや連絡が取りにくいところもあったが、プログラムも開幕に間に合い、はじめることができた。

しかし、初日の第1試合、葛西工と南葛飾のゲームでアクシデント発生。もともと9人しか登録できず、しかも9月に部員が学校を辞めて8人になった葛西工業のGKが鼻を骨折。7人対11人となる散々の開幕戦。続く第2試合でも腕の骨折(脱臼?)で救急車を呼ぶこととなり、前途多難な初日であった。

関係者の間では、「大会規定をもっとゆるやかに」という話が出た。「きちんとした本格的な大会である」と言わないと、生徒が乗ってこないのではないかとという危惧もあったため、最初から高体連並みに規定

を厳しく設けたのだが、それが裏目に出た形となった。例えば修徳は、2チーム参加でもまだまだ人数に余裕がある。試合に出られないプレーヤーを相手チームに貸す「レンタル移籍」があってもいいのでは、あるいはOBやスタッフが「助っ人」としてゲームに出場するといった柔軟な対応もあっていいのではということで、次回からは臨機応変に対処しようということになった。

#### <第2地区> (足立・文京・豊島・中央)

##### ○DUOリーグ

9月から第12回DUOリーグが開幕。高校サッカー部が14、クラブユースが1、後期だけ参加の文京区と豊島区の中学生選抜、そして大学が1と、計18の「DUOクラブ」から26チームが参加して、1部8チーム、2部は6チームずつ3ブロックつくって最後にプレーオフを行う方式で行っている。2チームが自動入れ替えである。

参加クラブは年々増加している。理念に賛同し、協力してくれる仲間が増えるのはいいことである。どんどん受け入れたい。が、1部リーグの「出口」がないので頭打ちになっており、運営も大変。上位リーグをより広範囲の地域で立ち上げ、DUOの出口をつくるのが底辺の拡大にもつながる。これが「衛星型サッカー環境」につながる考え方でもある。

##### ○Aリーグ

2000年度は、足立学園、江北、都立、安田学園、小岩、葛飾野、正則学園、FC東京の8チームで、「公式戦もなく、かつ遠征に行くわけでもない」1月末～3月末にかけて実施した。「オフシーズンなしのサッカー漬け」にしているのは、「もっとやらなきゃうまくならない！」という考えからであり、40分ハーフのリーグをこの時期に経験できたことが、2001年度の春～夏のシーズンに生きてきた。あくまでも「仲間うちの強化リーグ」であり、「8チーム限定」で行っている。

この時期は地区選抜やリーダー研修会で各チームの中心選手が抜けていくので、それ以外の者でゲームを行うことができ、チームの底上げになって良い。参加クラブのBチームで「2部リーグ」を行い、結果的に補欠ゼロが確立している。各クラブのA-Bチーム間の移籍も、中学3年生の出場も、自由な交代も認める「実験的な場」となっている。

「DUOリーグの理念には賛成だが、全体的な枠組みが固まるまでは、今のやり方がチームの強化としてはいいと思う。シーズンを設けてやるのは、うちのチームにはまだ早い。また、このように考えているチーム、指導者が多いのも事実だろう。2001年度も同じような形で行いたい」(遠藤氏)

#### <第3地区> (板橋・台東・北・新宿・渋谷)

「第三地区プレユースリーグ」は、DUOリーグをモデルに発足、事務局を三堀氏が担当し、北野、岩倉、駿台A・B、国学院A・B、海城A・Bの、高体連の委員校5校、8チームで構成し、9月2日から始まった。70分ゲーム、選手交代自由というルールはおおむね好評で、プレーヤーのモチベーションも高い。参加費を1チームあたり5000円徴収し、DUOリーグが作っているようなプログラムを作成した。写真

と名前を入れることで、部員にとっていい思い出になる。

大きな課題はグラウンドの確保である。北野高校では硬式野球部が強くなり、グラウンドの確保が困難になってきた。また、元はといえば硬式野球のボールが外に飛び出したのがきっかけなのだが、「近隣住民の、ボールが飛んできて迷惑しているという声が、都議会議員から都教委にいき、今後の開催が危ぶまれるところです。来週はさいたま市の駿台グラウンドと武蔵境の岩倉グラウンドで開催となりました。三地区以外の場所でリーグが開催されることの矛盾を感じています」（三堀氏）との状況であった。

#### <第4地区>（千代田・港・品川・大田・島嶼部）

9校12チームを2つのブロックに分けて行っている4地区のリーグは、DUOリーグの名付け親、上野二一氏（現日比谷高校）によって「セントラルリーグ」と名づけられた。あと1試合で全試合を終えるところまで来ている。

Aブロックに正則学園A、高輪、芝B、明治学院、立正、九段、Bブロックに日比谷A・B、正則学園B、芝A、東洋、大森工業と、6チームずつの2リーグ制でスタートした。

「各ブロックの順位を決め、最終日(12/23 予定)に順位決定戦を行い12チームの最終順位を決定」する。試合は全て40分ハーフで、選手交代は自由。移籍については同一クラブ内のみOK、中3の出場も、保護者了解の上で各顧問の判断で行うこととなっている。

三宅高校サッカー部員は、現在も秋川高校で生活している。そんな関係で、本宿委員のみている生徒は8地区のプレリーグ（多摩工業との連合軍）とDUOリーグ（京華Bとの連合軍）に参加しており、4地区のリーグについては事務的な仕事をするだけで現場の状況がわからない。運営委員会の集まりが悪く、話したことが伝わらないのが問題。「プレリーグ」の重みの感じ方に温度差がある。

12月23日の最終日に、参加費を徴収、審判と会場に割り振る予定。A4版2枚程度の通信を、これまで8回送っている。そこにはリーグ戦の結果だけでなく、加盟クラブの都大会での様子などの情報も載せて、「下町風の」仲間意識を育てようと思っている。

#### <第5地区>（練馬・中野・杉並・西東京市）

高校選手権最終日に、高体連の委員校に募集をかけ、同時にクラブユースにも声をかけて「ジュエントス」と「エスペランサ」が加盟した。9月20日に実行委員会を開催、大枠が決まった。

参加クラブは、レベルごとにA、Bのカテゴリーに分かれ、それぞれで総当りのリーグ戦を行い、2チームを入れ替えて、2002年度前期リーグまで行うことが決まった。プレリーグである本年度後期のメンバーで、2002年度前期をもう一度やってみるということである。

A-1…西A、早稲田高等学院A、中大杉並A、田無工業、ジュエントスA

A-2…武蔵A、保谷A、東亜A、西B、EsperancaA

B-1…西C、早稲田高等学院B、中大杉並B、ジュエントスB

## B-2…武蔵B、保谷B、東亜B、Esperanca B

リーグ運営に関しては、スタッフの仕事を「試合運営担当」「記録担当」「会計担当」に分担し、10月1日開幕に間に合うように日程表やメンバー表をつくる。メンバー表は、あらかじめ名前を入れたものに番号とメンバーに印をつける形式を採用する。審判評価表もつくる予定。

グラウンドを持っている学校が多いのだが、会場校に甘えることはしない。その日の「主催チーム」を決め、そこが会場準備・運営・片づけ、さらに試合結果を運営担当と記録担当に報告する「主催チーム制度」を採用。自主運営の意識を高めるのがねらい。

試合は80分ゲーム、レンタル移籍は柔軟に、紳士的に。

天候にも恵まれ、順調にリーグ戦は進んでいるが、「審判」について問題点が出てきた。DUOリーグにならってできるだけ高校生が笛を吹くようにしているのだが、どうしても判定に文句が出たりする。「マッチコミッサー」に判断を仰ぐことを取り入れる必要があるかと考えている。

### <第6地区>（目黒・世田谷・町田市・狛江市・稲城市）

DUOリーグを参考に、97年冬よりSリーグ（世田谷区）、98年よりMリーグ（町田市）が発足したこの地区だが、理念を共有しているとはいえ、先に始まっているため、今年度から期間やチーム数などを合わせるの難しいとのこと。例年どおりの形式で行われることとなった。

Sリーグは、1部が5チーム×2ブロック、その後順位決定戦、2部はBチームリーグとして4～5チーム×2ブロックでその後順位決定戦を行うとしている。1～2月に実施しているMリーグは新人戦終了後、12月～3月にかけて行っている。6チームが参加する。

いずれのリーグも、課題となるのは、会場、運営、そして引率の問題。

会場については、9月の時点で11月までグラウンドを押さえられる学校が少ないという事情もある。Sリーグでは試合日だけ決めておいて、場所が確保できたところで「通信」で流すようにしている。運営はDUOリーグと異なり、輪番制にしているため、その年の担当者に仕事が集中するので大変。付き添いについては、学校の活動としているため、顧問の付き添いを求めている。日程消化のための連戦もある。このあたりが課題。

参加希望チームは多いのだが、運営上の諸問題により、現状では参加を断っている状況である。

### <第7地区>（三鷹市・調布市・府中市・国立市・立川市・日野市・多摩市・八王子市）

基本理念や目的は、DUOリーグをモデルとしながらよりやわらかく表現した。リーグ戦だがPK方式を導入したのは、高体連の大会準備の意味もある。ユース審判賞も含めた各賞を設け、励みにしている。事務局は角本氏と石亀氏。

参加チームを、希望により1部・2部に振り分けたところ、1部希望が10チーム、2部希望が5チーム

となり、1部を5チーム×2リーグとした。2002年度は1部を8チームにして、新規参加は2部からとしたい。

1部北東リーグ…三鷹、北多摩、調布北、昭和第一、八王子東

1部南西リーグ…松が谷A、富士森、明中八王子、南多摩、堀越A

2部リーグ…八王子工、松が谷B、第2商、片倉、堀越B

三鷹や堀越はフルメンバー登録だが、調布北はBチームを出し、公式戦出場機会が少なそうな者の経験の場としてエントリーしている。複数チーム参加は、堀越と松が谷。今回は、メンバーの入れ替えはなしとした。

2軍戦(B戦)の希望が多く、時程にあらかじめ組み込むこととした。

例)午前パターン：

第1試合 9:00～10:10(30分ハーフ) B戦 10:20～10:50(30分1本)

第2試合 11:00～12:10(30分ハーフ) B戦 12:20～12:50(30分1本)

午後パターン：

第1試合 13:30～14:40(30分ハーフ) B戦 14:50～15:20(30分1本)

第2試合 15:30～16:40(30分ハーフ) B戦 16:50～17:20(30分1本)

通信は、毎週発行は難しいので「中間報告」と「最終報告」のみとした。

参加費として、1部リーグ7,000円、2部リーグ6,000円を徴収。1部には順位決定戦があるので2部よりも1試合多く経験できるため。

「ユース審判」について、趣旨は賛成だが、試合が荒れないかとの心配の声があり、「ユース審判の場合、判断に迷ったり判定に自信がなかったような時には本部に確認をしてもいい」こととした。

実際にやってみると、やはり「審判」に関する意識の低さが目立つ。また、自分たちで運営するという意識にまでたどり着いていないことを感じる。

今回の「プレリーグ」の成り行きを見ているチームが沢山ある。「なかなか良さそう！」と思わせることができれば、広がっていくかもしれない。

<第8地区> (武蔵野市・小金井市・小平市・国分寺市・清瀬市・東久留米市・東村山市・東大和市・武蔵村山市・あきる野市・青梅市・西多摩郡・昭島市・福生市)

8地区では、28チームの参加希望があり、また範囲も広いため、7チーム×4ブロックに分け、それぞれにチェアマンを決めて独自に進めている。最終的には4ブロックのチャンピオン同士で、8地区のリーグチャンピオンを決めようという話になっている。

A…多摩工、ミヤ・タマFC注)、羽村、五日市、青梅東、福生(1)、青梅U-15セレクト

B…昭和、国分寺(1)、久留米B、東大和A、武蔵村山、福生(2)、錦城

C…武蔵A、清瀬、久留米1年 $\alpha$ 、東大和B、東海大菅生、東村山西、東村山  
D…成蹊、武蔵B、久留米1年 $\beta$ 、小金井北、東京電気大、国分寺(2)、自由学園  
注)三宅高校と多摩工業の連合軍

Aグループは「チャレンジOLリーグ」として、青梅線沿線の高校生クラブが対象となっている。過去の実施経験・実績もあるので、参加費を徴収して運営に充てている。他のリーグでは徴収していないため、例えば福生高校からはAとBに参加しているが、Aでは参加費を徴収し、Bでは徴収しないといった問題が起きている。今後の課題。

Aグループ（OLリーグ）ではまず新人戦までの日程をつくり、10月に再度会議を開いてその後を検討することになっているが、Dでは9月8日から12月16日までの日程表を作成し、それに基づいて行っている。雨天延期の場合は当該チーム同士で連絡を取り合っていることとし、12月23日の最終日以降は無効。これで、参加する各チームの主体的な参加を促している。

Dグループは順調に試合も進み、10月14日の時点で小金井北高校の優勝が決まった。日程消化のため1日2試合行うチームもあり、「とにかく消化している」という感じになっている。今後の課題。

#### 4. 2010年のサッカー環境—ユース年代を中心に

今、ユース年代のサッカーの改革についていろんなところで話が進んでいる。例えばJFAにおいては、以下のプロジェクトが関係するだろう。

- 1) JFA技術委員会・ユース強化育成部会（部会長：小野剛氏）
- 2) JFA第2種大会部会（部会長：上野二一氏）
- 3) JFAクラブづくりプロジェクト（リーダー：久米一正氏）
- 4) JFA登録プロジェクト（座長：森健児氏）

また、JCY（日本クラブユース連盟）においても、「2010年のサッカー環境私案（中塚案）」が、2001.10.23.の理事会で提起された。詳細は他の機会に譲るが、大きな改革の時であることは間違いない。その流れを視野に入れながら、「東京都ユースリーグ」についても検討を進めたい。

#### <ディスカッション>

##### ●プレリーグの高校生への影響

- ・練習試合の組織化ではあるが、「緊張感のある練習試合」が参加する高校生に良い影響をもたらしている
- ・高校生は、携帯を持っていることもあって、互いの情報交換が非常に早い。プレリーグに参加していな

い高校のサッカー部員の「参加したい」という声を耳にする

・強豪高校はゲームをする環境がすでに整っている。底辺の部分のモチベーションを上げていけるように思う。

#### ●クラブユースの参加の可能性

・クラブユースの日程は高体連と少しずつずれている。DUOリーグでも三菱養和がらみの試合は消化しにくいときがある。養和にはナイター照明付きのグラウンド（人工芝）があるから消化できるが、グラウンドのないクラブだとスケジュール消化が難しいかもしれない

・クラブユースがプレリーグに参加することはそれほど難しい問題ではない。けど「理念」がピンと来ない。強化なのか育成なのか普及なのかのかが見えない。

#### ●リーグシステムの趣旨について

・強化でもあり、育成でもあり、普及でもある。競技志向の者は毎日トレーニングして週末の、レベルの高い者同士のリーグ戦に臨む。底辺は底辺で、同レベル同士のリーグ戦に臨む。強化でもあり、育成・普及でもあるのがこのシステムの特徴。今は、普通の高校生を競技志向に引っ張りすぎているのではないか。週3回ぐらい好きなサッカーができて週末にゲームできればそれでいいという者も大勢いるはず。道を広げればサッカー人口はもっと増える。リーグシステムを底辺からトップまで作るが、ピラミッドではない。上に上がらない者、底辺で完結する者がいてもいい。

・上位リーグがないとつらいのも事実。DUOリーグは今、出口がないので下にどんどんたまってきている。下からはじめて少しずつ上に積み上げ、最終的には東京都全体で1部、2部とあって、FC東京、横浜、東京ヴェルディらとともに、帝京高校や修徳高校などの強豪が、週末にリーグ戦をやっているようにしたい。そこを抜け出て関東ユースリーグに入っていくところもある。トップリーグと底辺のリーグがつながった「衛星型サッカー環境」を目指す。

・これを一つのシステムとしてうまく回していくには、参加する者の当事者意識が不可欠。それがないと、多くのゲームをこなしていくことは不可能

#### ●多様な「クラブ」の現状

・（高体連指導者より）ジュニアならお父さんお母さんのボランティアというのがあるけど、ジュニアユース以上になると、「クラブユース」指導者は基本的にはそれで収入を得ているプロである（と思う）。会費収入とかで経営している。そこに通う子どもたちは、学校の部活とは明らかに違い、高い会費を払ってサッカーうまくなろうとして、ある程度プロを意識するような子も当然沢山いるのではないか。

学校部活動だと、安い部費で楽しめる。いろんな部員がいる。底辺の楽しみ志向のリーグの話はクラブユースにはなじまないのではないかな。

- ・クラブにもいろいろある。東京の中でジュニアユースは 60 チームぐらいあるが、ユースは 10 チーム程度。なぜ減ってしまうのか。指導者の問題や地域での友達の関係もあるが、一番は場所の確保の問題。いい指導ができるけどいい環境がない。だから減っている。意識の高い子が集まるクラブはいいが、そうでないレベルのクラブにいる子どもたちには底辺からのリーグは非常にいい

- ・グラウンドを持っていないクラブにとっては、リーグに参加することで、場所の確保という意味でメリットがある

- ・高体連の部活動でも同様。都心で行われているDUOリーグでも、グラウンドを持っていないところには大きなメリットがある。しかし、グラウンドを用意できない代わりに「自分たちのできることをする」のが前提。運営の当事者になるという意識が不可欠

- ・協会・連盟に登録しないクラブユースも沢山ある。高い加盟費に見合ったメリットがないと感じたクラブは自分たちで独自にリーグを組織して、その中で活動している

- ・ジョカトーレは、おやじが子供のためにつくったクラブ。中学校のサッカー部での練習や試合が不足している子どもたちや、学校にサッカー部がなく、サッカーをする場所がない子どもたちを集めてジュニアユースをつくったが、ユースの方は高校の部活動を続けられなかった子、クビになった子、事情があって高校に行かずに働いている子が入っている。会費も月 1,500 円程度。場所がないのが課題。近くの高校のグラウンドを月に 2～3 回借りてゲームをやっている。日常の活動も、高校のグラウンドや中学の体育館を借りてやっているが、定期的なリーグがあれば、子どもたちにとってすごくありがたい。自分たちで独自にリーグを組織しているが、DUOリーグとユースリーグの話を目にして、今日ここにきた

## ●学校運動部の限界と展望

- ・(クラブ指導者より) 都立高校では、伝統的に強い学校と、先生の指導によって強くなってきている学校とがあると思う。一番気になっているのは、先生が異動されたときにどうなるのかという問題。異動した先では盛り上がるが、熱心な先生がいなくなったらそれでおしまいでは続かない。プレリーグは、いずれも学校単位で登録してやっているが、トレセン活動とからめて、意識も高く、能力の高い者を集めて選抜チームを作り、リーグに参加するようなことがあっても良いのではないかな。指導者が異動しても、地域の選抜チームで活動できるような形はできないかな。

- ・学校にこだわってやっていたら続かない。学校基盤、企業基盤の組織だと、学校や企業がこけた時にスポーツの場なくなる。スポーツが基盤となるクラブを育てることが不可欠。その際、「クラブ」の概念を広げて捉える必要がある。これまで「クラブユース連盟」で把握していたのはJリーグ下部組織のクラ

ブと、それ以外の地域クラブ。高体連が把握していたのは学校運動部。この間に、「学校運動部の連合組織」の性格を持つ「クラブ」を育てていく必要があると思う。これには複数校の連合軍や、OBも含めた多年代のクラブ組織が考えられる。こういった形態が日本型クラブのモデルとして考えられるし、これから10年の間にやっていかななくてはならないことではないか。DUOリーグ全体が一つのクラブという、[FCDUO] 構想もある

#### ●東京都高体連の新人戦改革案について

- ・11月に各地区でやっていた新人戦を、1～2月に都大会までやり、東京都の新人戦チャンピオンを決めるという案が進んでいる（従来は地区大会でおしまい。新人戦で各地区を勝ち抜いた学校は、4～5月に関東大会予選を、都大会からはじめていた）。このため、1～2月がオフシーズンでなくなるだけでなく、12月までのリーグ日程も、さらに組みにくくなる。

- ・2002年度から始まる「関東ユースリーグ」に、東京都からどこを出すのかといったところから話が始まったようである。リーグができてくれば、東京都リーグの上位2チームが関東に出て行く流れができる。今は都リーグはない。だから新人戦の都大会をすることになった。リーグができるまでのつなぎだろう。

- ・そこが「つなぎ」であるという確証はあるのか。それがないとユースリーグ構想自体危うくなる。

#### ●ユースリーグを広げるために

- ・8地区や6地区には、プレリーグ以前にすでに下地があった。それ以外の地区にはなかったけど、今その掘り起こしが始まった。トレセン活動が始まったときも、2年ぐらいやってみて、当時の都技術委員長から「やめる」という話が出た。「東京ではできないよ」と。技術委員長が変わり、組織を変えて踏ん張って、つぶれないように頑張った。その時のように、上の方の人とうまく連絡を取りながら、草の根を組織していければユースリーグもできるのではないかな。

- ・クラブでは「リーグ戦」がベースになっている。高体連では「トーナメント」が普通。トーナメントこそがチャンピオンシップだという考え方が高体連の先生方にある。高体連の先生方の、大会に関する意識を変えていく必要がある。クラブの人の方が柔軟に聞き入れてくれるように思う。

- ・リーグは日常的な営み。リーグがあるからスポーツが生活の中に位置付けられる。カップ戦、フェスティバル、定期戦などは非日常のお祭り。文化祭や体育祭と同じ学校行事のイメージであり、行事前にドタバタと準備をしているのがこれまでの運動部活動のパターン。いろんなイベントが年間計画の中にちりばめられているのが必要

#### ●業者の立場

・(業者より) フェスティバルなど自分たちで手がけるものについては、来て頂いた方に少しでも「楽しさ」を感じてもらいたいと思っている。そのため宿に試合結果の速報を掲示することなどを、宿とも話しながらやってきた。

・業者におんぶにだっこになってしまうと良くない。現場は指導者がリードして、ニュースの部分など、周辺の部分を業者にやってもらうのがいいのではないかと。

・(業者より)「業者のあり方」を考えている。理念については、先生(指導者)の理念でいく必要があるのではないかと。先生が、サッカーの中身で力を発揮できるようなお手伝いをしたいと思っている。

・4ヶ月のリーグ期間、業者のスタッフがべたについている必要はない。例えば、「毎週月曜日の夕方ここに来てリーグの仕事を手伝う」という形で契約するようなことが現実的ではないかと。

・「外注すると余計にお金がかかるから自分たちでやっしまえ」となってしまう。どれくらいが妥当なのだろう

・お金が回る仕組みをつくる必要がある。リーグ運営は、いずれある部分を外注する必要があることを見越して、DUOリーグではほんのわずかだが謝金を払うようにしている。チェアマンと競技・広報・会計の各担当に、「1シーズンにつき2000円(!)」。業者さんはこれではやっていけない(笑)。けどボランティア精神は不可欠

・サッカーだけではお金は回らないだろう。例えば、「後期の開幕ゲームは波崎へ移動」など、サッカーと「移動」がセットになってはじめてお金が回る。

## ●今後の議論の進め方

・ユースリーグの話を高校の先生だけでしていてもだめ。いろんな人が集まる場で進めていきたい。「サロンのプロジェクト」として立ち上げるのも一つの手。

### <感想・意見(中塚義実)>

高体連の教員で進めていた話に、いろんな分野の方が加わった今回の議論。最初はちぐはぐなところもあったが、なじんでくると、思っていたとおり非常におもしろくなった。

「ちぐはぐなところ」は、たいていはコミュニケーション不足による互いの"距離感"や"誤解"が原因である。高体連とクラブの間にある"誤解"、強豪校(またはその予備軍)と(サッカーの)底辺校の間にある"誤解"、指導者とエージェント(業者)の間にある"誤解"…これらが随所に感じられたディスカッション

だった。

高校－クラブ間の"誤解"には次のようなものがある。「クラブの方が環境が整っている」「クラブの指導者はサッカーで生活している」「クラブではサッカーばかり指導して人間の指導ができていない」…。高体連には、クラブチームに対してこういう見方をしている人が依然として多い。耳に入ってきた一部の情報を頼りにイメージを膨らませると、こういう"誤解"に行き着くのだろう。「そういうところもあればそうでないところもある」。顔をつき合わせて話せばわかることである。

強豪－底辺間の"誤解"は、Jクラブと地域クラブ、私立の強豪高と国立の弱小高（どこのことや?!）など、高体連・クラブユースに関係なく存在する。これもコミュニケーション不足による互いの未理解が原因である。「勝てば官軍」ではないけれど、勝たないと（強いチームを作らないと）一人前扱いされない風潮はいまだにある。けど、チームが弱いからといって、正しいことを主張するのをやめてしまうと、そこには「強者の論理」しか残らない。強くなってからものを言うのでは遅すぎる。

指導者－業者間の"誤解"は、相手のことがよくわからないため先回りして考えすぎている部分が、特に指導者側にあるように思う。ユースリーグの運営は、まずは自分たち自身でやってみるべきだが、大きくなってくれば、部分的に（または全面的に）業者に委ねることもあるだろう。その時、どのようなスタンスで向き合ったらいいのか。業者を毛嫌いすることはないし、過大評価することもない。話がでかくなってもビビルことはないし、振り回されることもない。サッカーはピッチの上にある。サッカーの側（競技団体）が明確な"理念"を示すことができるかどうか。その"理念"に業者が賛同し、パートナーとしてともに育てようとしているかどうか重要なのである。規模は全然違うが、高体連もクラブユース連盟も、J F A（日本サッカー協会）も F I F A（国際サッカー連盟）も、この部分においては皆同じである。

とにかく、いろんなところにある"誤解"を取り除くためにも、コミュニケーションの場（例えば飲み会）を設け、対話を続けることが必要だと感じた。J F Aが進めようとしているいくつかの大きな改革も、いろんな人と意見交換して作り上げていく必要がある。その意味で、J F Aの村山さんがやってくる次回のサロンは楽しみである。

一つ間違ふとえらいことになるが、ここでいいものができれば、2002年以降、この国にホンモノのサッカーが、スポーツが根付いていく。「今が本当に正念場」である。